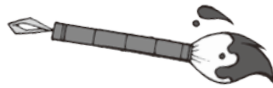


## 新・下野市風土記

## 華麗なる一族(3)



下野市教育委員会 文化財課

## 大宝律令制定後の古麻呂の活躍

これまで2回にわたって、下毛野朝臣古麻呂が大宝律令の制定に重要な役割を果たしていたことについて記しました。今回はその後の古麻呂の業績と関係者について記してみたいと思います。

## 軍事のトップ官僚としての古麻呂

慶雲2(705)年4月22日には、従四位下となった古麻呂は兵部卿に任じられます。兵部卿とは兵部省の長官です。では、兵部省とはどのような組織なのでしょう？

兵部省は、諸国の軍団・兵士・兵器・軍事施設に関する最高機関であり、武官の勤務評定・人事権をもっています。兵部省の下部組織として、諸国の牧(牧場)とそこに属する牛馬の管理、駅制に関する駅家やそこで働く官吏を所管する兵馬司、兵器製造とそれに関わる様々な製造部局を管理する造兵司、公と私の船舶の管理を行う主船司、鷹狩り用の鷹と狩猟犬を管理する主鷹司、軍事・葬儀における鼓笛調練をつかさどる鼓吹司があります。

都(畿内)と各地(七道)を結ぶ幹線道路に配置された駅家とそこで勤務する官吏に関する権限、駅家に配置するための馬の生産に関わる「牧」の統括権ももっていたことから、重要なポストであったことがわかります。

下野国内(東山道)には、足利・三嶋・田部・衣川・新田・磐上・黒川の7駅が置かれていました。また、現在の栃木市(旧藤岡町)赤麻地区に「朱門牧」が置かれていたことが『延喜式』には記されています。関東地方でも名馬の産地として有名な地域だったようで、名馬に関する伝説が残されています。

兵器製造は、平城京だけでなく、全国各地で行われました。東国で有名な遺跡として、茨城県石岡市鹿の子遺跡を挙げるができます。鹿の子遺跡は、1984年に常磐自動車道の工事により発見されました。奈良時代後半～平安時代の前半期の蝦夷征討に関する武器製造工場のような、常陸国衛が所管していた工房と考えら

れ、中に製鉄用の炉が複数造られた長大な竪穴建物の遺構が発見されたほか、「矢作家」と記された墨書土器や製鉄に関する資料が出土しています。また、宝亀8(777)年の記事ですが、相模・武蔵・下総・下野・越後国から出羽国鎮守府(出羽柵・雄勝柵)に甲200領が輸送されています。さらに下野国府からも、甲の製造に関する木簡が出土しています。

このほか、1000人以上を大軍団、600人以上を中軍団、500人以下を小軍団として、各地で軍団が編成されました。そのために全国規模で成人男子の約1/3が徴発され、この中から都を守る衛士、九州に派兵される防人が選抜されました。この徴兵のために、個々の住民を記載する戸籍をつくったわけです。

有名な軍団として、「御笠軍団」「遠賀軍団」があります。これは、筑前国に置かれた4軍団(兵士4,000名)のうちの2つで、過去にそれぞれの軍団印が出土しています。ちなみに、筑後(3,000名)・肥前国(2,500名構成)に3軍団、豊前(2,000名)・豊後国(1,600名構成)に2軍団、肥後国に4軍団(4,000名)が置かれました。九州だけでも17,000名を超える兵士が配置されていたわけです。

東北地方(陸奥国)では、玉造団、白河団、名取団、行方団、安積団、磐城団、小田団が置かれています。「番長」という言葉は、この軍団において交代制の勤務の当番を指す言葉で、多賀城跡から軍団兵士の勤務に関する番長を記した木簡が出土しています。

このように兵部卿というポジションは、できたばかりの日本という国の軍事権を掌握する立場だったのです。